宇陀松山 デザインブック

2024 UDA MATSUYAMA

監修
奈良女子大学生活環境学部
住環境学科専任講師
坂井禎介

著・デザイン
奈良女子大学建築史研究室
内野麗　山田祐菜

はじめに

宇陀松山の歴史

飛鳥時代から「阿騎野」と呼ばれ、宮廷の狩場だった大宇陀に
戦国時代「宇陀三将」と称された秋山氏が城を築き、その麓に
栄えた城下町が宇陀松山地区の始まりとされています。
以後、宇陀松山藩や天領時代などそれぞれの時代の影響を受けながら、
今日の町並みを形成してきました。
その町並みが今も生活の場としながらも景観を保ったまま残っている
地区です。
2006 年には「重要伝統的建造物群保存地区」（下記）に選定されました。
(参照　宇陀松山観光ホームページ、宇陀松山パンフレット)

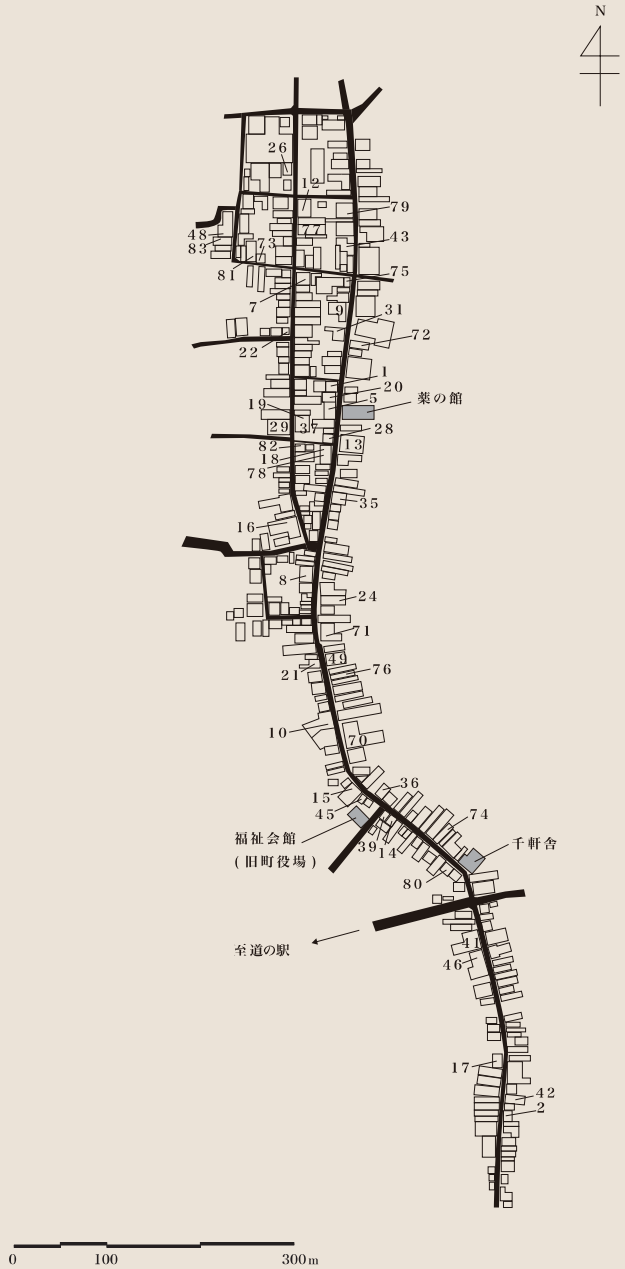
デザインブック　とは

このデザインブックは重要伝統的建造物群保存地区に選定された
宇陀松山の景観を守り後世に引き継いでいくために宇陀松山地区の
景観を形作っているデザインを取り出し紹介するものです。
宇陀松山地区は平成 10 年度から 12 年度に調査がなされ、『せせ
らぎと手わざの町　大宇陀・松山　―松山・神戸地区伝統的建造物群
保存対策調査報告書―』が発刊されました (以下、調査報告書と略)。
今回、約 20 年ぶりに調査をしました。

「重要伝統的建造物群保存地区」（略して「重伝建」）　とは

古い民家がその地区全体に残る町並みの内、重要だとして文化財に
指定された町並みのことです。
昭和 50 年の文化財保護法の改正によって「伝統的建造物群保存地区」
の制度が発足し、城下町、宿場町、門前町など全国各地に残る歴史的な
集落・町並みの保存が図られるようになりました。我が国にとって価値
が高いと判断したものを重要伝統的建造物群保存地区に選定します。
その地区に選定されると、その町並みの外観を維持するために外観の
改変（家の内部の改変は自由度が高い）に一定の制限が設けられますが、
破損箇所の修理、古い町並みに合わせて古い外観を作る修景、防災設備
の設置、案内板の設置などに対して、補助金が出され、税制優遇も受け
ることができます。　(参照　文化庁ホームページ)

宇陀松山地区略地図



凡例
1 ～ 49　調査報告書表 3-2(p.12) 記載の町家　番号は表 3-2 と対照
70 ～ 83　地区内で調査報告書表 3-2 対象外の町家　新しく番号を付けています。
建築年代は調査報告書を参照して記載

町家の変遷

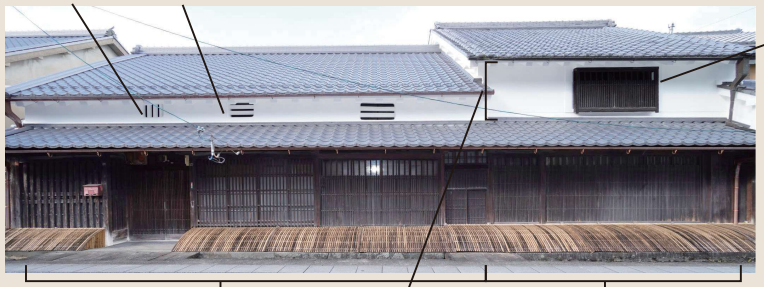
重伝建の魅力は、古い町並みが面的に残っているため、様々な時代の民家が見られることです。２階の階高に注目してみてください。２階は、元は物置で、人が過ごすことは想定されませんでしたが、時代が下ると人が入る居室となります。そのため、２階が高くなる傾向があります。また、宇陀松山地区では、後世に２階を増築している町家も多いです。

２階の虫籠窓（むしこまど）や、卯建（うだつ）等、時代が下るほど、派手に巨大化する傾向が一般に読み取れます。皆さんも、時代ごとの変化を発見してみてください。

江戸中期 (13)

江戸後期以降には格子の上に、装飾的な格子が付けられるようになりますが、江戸中期にはシンプルな格子のみが並びます。

縦向きの虫籠窓（むしこまど）、横向きの虫籠窓（むしこまど）など、バリエーションが豊富になります。



(28)

明治前期 (4)

細い格子（この奥に接客の座敷がある）と太い格子（座敷に比べて格が低い部屋がある）があり、内部の部屋の格式が外部に表現されています。

大正 (45)

料理旅館 (後に診療所に変化) だったため、意匠が凝らされています。

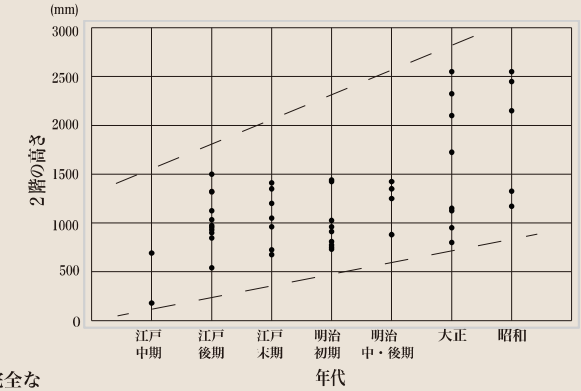


図　建築年代と２階高さの関係

（時代が下るほど２階の高さが高くなることが分かります）

昭和 (17)

大正時代頃からは、洋館も建てられました。瓦屋根があり和洋折衷のデザインです。

上：大正 (22)
下：大正 (31)

大和棟の町家や、オリジナルな意匠を持つ住宅もみられます。

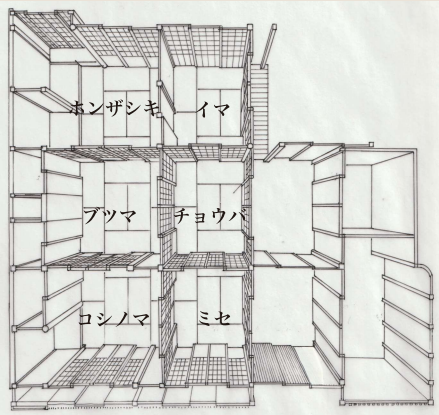
明治後期 (26)
大和棟の町家

昭和 (43)
塀が特徴的

町家の特徴

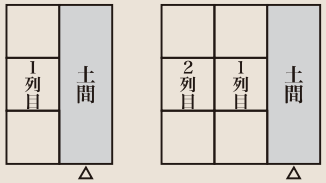
町家は、一般的に、土間に沿うように居室を入り口から奥にかけて並べる傾向があります。宇陀松山地区では、１列３室型や１列４室型、２列６室型など様々な間取りがみられます（図 3-9）。下図は、３列の居室が土間に沿って２列並ぶ「２列６室型」の間取り図です。

土間を挟んで居室と反対側にシモミセ（ミセノマの補助や物置として使う部屋）を持つ町家もみられます。宇陀松山地区では様々な間取りがみられますが、中でも１列○室型と２列シモミセ付型の間取りが比較的多くみられます。



２列６室型（13）の間取り図

参照　調査報告書の p.75



１列３室　　２列６室

図 3-9　町家の間取り *

＊引用　調査報告書の p.15

屋根の片側を入母屋造屋根とし、その反対側を切妻造屋根にするものを、片入母屋と呼びます。宇陀松山地区では、交差点に面する町家に片入母屋があります。入母屋が良く見える交差点側に向くことから、入母屋を見せようとしたことが分かります。下の写真のように、直交する道が神社の参道であり、その参道の奥には入母屋造屋根の神社があります。この神社の屋根に呼応するように、交差点の民家の入母屋造屋根が作られます。

明治前期 (71)

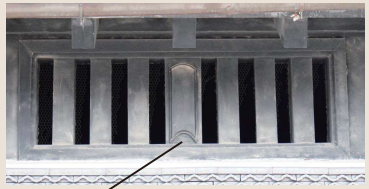
宇陀松山地区の町家は、切妻造屋根が多くみられます。地区内には、格子、虫籠窓、持ち送りなどの伝統的な町家の外観要素が数多く残っています。

次ページからは、その伝統的な外観要素の特徴について具体的に紹介していきます。

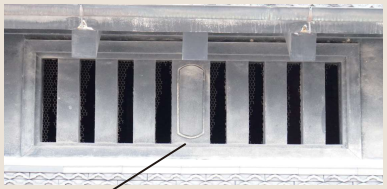
【次ページで扱う外観要素の一覧】

一軒の町家に、形状や文様が異なる複数種類の虫籠窓があります。一様の形だとつまらないので、外観に変化をもたせようとしたのでしょう。以下は明治時代前期の町家 (71) です。

楕円形の虫籠窓



中央に矢の形の装飾



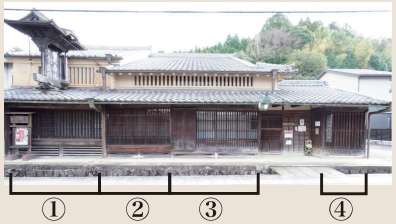
中央に楕円形の装飾

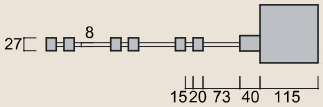
格子(一)

格子は、外部と内部をゆるやかに仕切ります。格子は、室内からは外の様子が良く見える一方、外からは室内が見えにくい特徴があります *1。また、日光を取り入れたり、風を通したり出来ます *2。

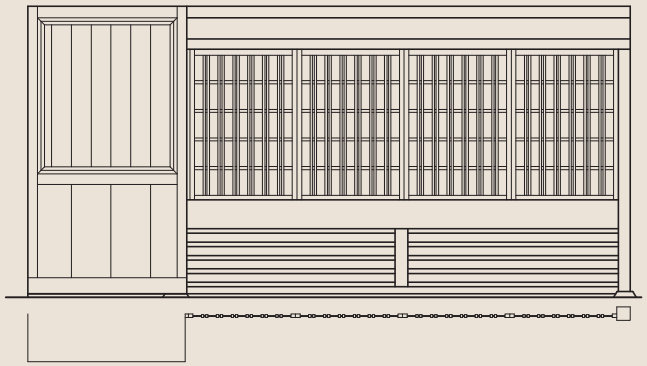
この地区の特徴は、一つの家に様々な形の格子があることです。薬の館に絞っても、①〜④の４種類の格子が使われます。格子の太さは部屋の用途によって、異なります。太い格子は土間などに使われ、部屋の格式が高くなると、細く、意匠の凝らした格子が使われます *3。

【薬の館　格子の図面】

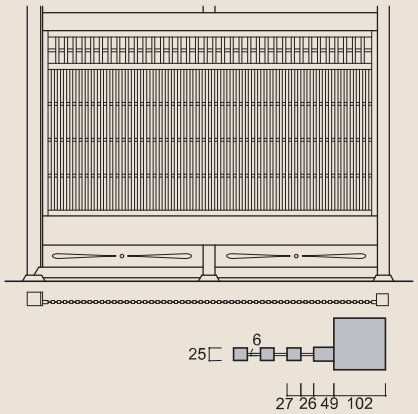




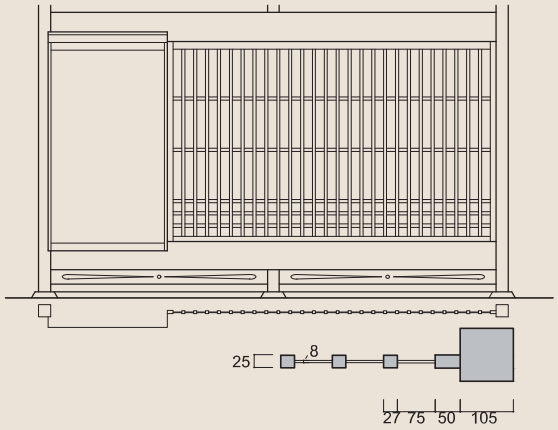
① 正面北側の格子（座敷）
細い格子（吹き寄せ格子）、赤色の塗装の痕跡が有る



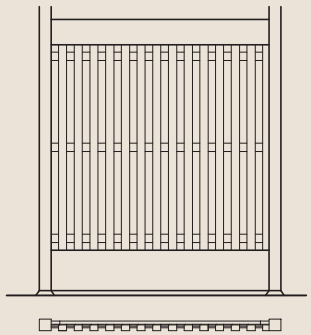
② ①の右隣の格子（畳敷きの部屋）
細い格子（上部が装飾的な格子）

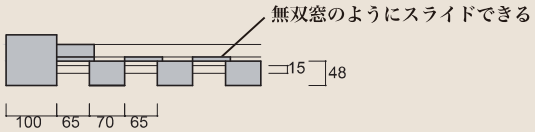


③ ②の右隣の格子（畳敷きの部屋）
細い格子（下段に３本の横桟）



④ 正面南側の格子（土間？）
太い格子





＊1 参照　日本民俗建築学会『写真でみる民家大事典』(柏書房 ,2005,p.63)
＊2 参照　川島宙次『民家のデザイン』(相模書房 , 平成元年第２刷 ,p.56)
＊3 参照　調査報告書の p.18

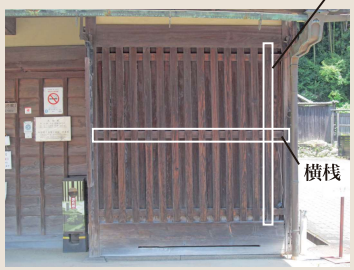
太い格子

組子が太い格子は、「格子の見つけ幅が 50 ミリ以上のものを太格子」*1 と定義されます。主に土間やシモミセの外部に使われます。そのため、住宅の玄関の隣に良くみられます。

また、横桟の入る間隔が、町家によって異なります。例えば、格子全体の枠に対し、横桟が等間隔に入る例 (A-C) や、地面から 1m ほどの高さの位置に横桟が二本セットで入る例 (D-F) がみられます。

＊1 引用　調査報告書の p.18

A 江戸中期 (13)
横桟が等間隔



B 江戸末期 (薬の館)
横桟が等間隔

C 大正 (37)
横桟が等間隔

D 江戸後期 (28)
横桟が中央に２本

E 明治中期 (46)
横桟が中央に２本

F 昭和 (17)　横桟が
中央に２本、下段に１本

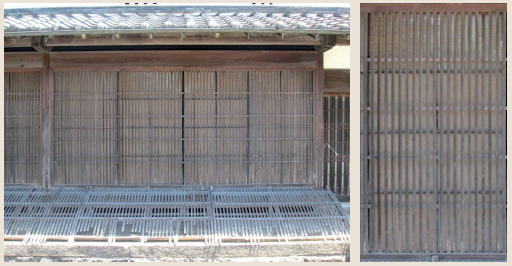
格子(二)

細い格子

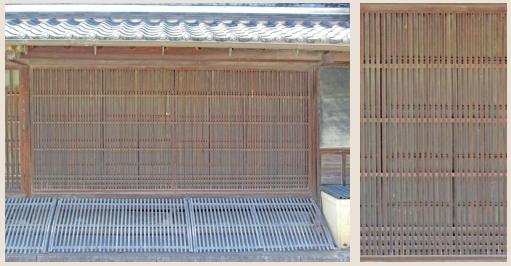
見つけ幅が「15 ミリから 35 ミリの」*1 格子が調査報告書で細格子と定義されます。組子が細い格子は、座敷の外部に多く使用されます。居室の外部に使用される例もあります。

細い格子は、様々な意匠が凝らされます。宇陀松山地区では、縦の組子が上から下まで通ったシンプルな格子の他に、切子格子 (G-I) や上部が装飾的な格子 (J-L) がみられます。組子の太さが異なる格子 (E,H) や、縦の組子の間隔が異なる格子 (F,I) もあります。

また、横桟の間隔も家により異なります。等間隔のもの (A,D) が多いですが、地面に近い部分のみ横桟の間隔が狭い格子 (B,C) もみられます。これは、江戸時代の町家に多いです。



A 江戸中期 (13)
横桟が等間隔

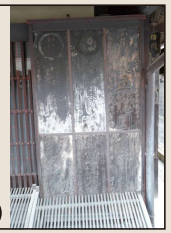


B 江戸後期 (8)
下段の横桟の間隔が狭い

C 江戸後期 (7)
下段の横桟の間隔が狭い

D 江戸末期 (18)
横桟が等間隔

雨戸を閉まっておく戸袋を持つ町家もあります。宇陀松山地区では、一枚板を使用したものや、看板が付いたものなど、個性的なデザインもみられます。



江戸後期 (1)

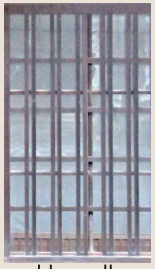
【親子格子】

「組子の太さが異なる 2 種類を組合わせた格子」*2

E 江戸後期 (70)

【吹き寄せ格子】

「組子を数本おきに間引いた構造の格子」*3



F 江戸末期 (薬の館)

【切子格子】

切子格子は、長い組子と短い組子を組み合わせた格子のことをいいます。縦の組子の組み合わせ方、組子の間隔にバリエーションがあります。

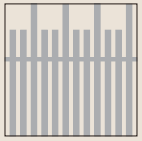
宇陀松山地区で一般的な切子格子

長い組子と短い組子が交互に並ぶ

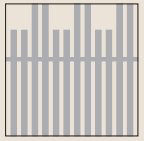
G 江戸後期 (8)

宇陀松山地区でみられる他の切子格子

長い組子 1 本と短い組子 2 本が並ぶ



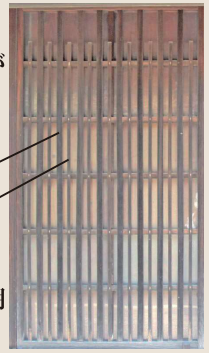
長い組子 2 本と短い組子 2 本が並ぶ



長い組子 2 本と短い組子 3 本が並ぶ

親子切子格子

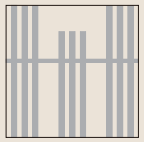
「親か子の組子の上部が切れている格子」*4



H 大正末 ~ 昭和初期 (21)

吹き寄せ切子格子

「縦の組子を数本おきに間引いており、なおかつ上部が切れている格子」*5



I 昭和 (43)

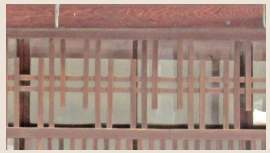
＊1-5 引用　調査報告書の p.18

格子(三)

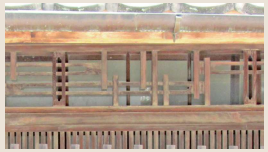
【上部の組子の組み方が装飾的な格子】

主に座敷に使われます。江戸、明治時代の町家にみられます。宇陀松山地区に残る江戸中期の町家２軒には、上部の組子の組み方が装飾的な格子は見られません。座敷玄関を持つような規模の大きな家に使用される例が多いと推測されます。

J 江戸後期 (20)



左図四角の拡大図 (20)



K 江戸後期 (10)

L 明治後期 (41)

【スリアゲ戸】

宇陀松山地区では、町家の表構えは、戸を上下に開閉するスリアゲ戸が一般的でしたが、明治初年以降にスリアゲ戸から格子へと替わっていきます。スリアゲ戸から格子へ変化したのには、商いが変化したため、採光を確保したかったためなど、様々な要因が考えられます *1。

現在スリアゲ戸が残る町家は一軒のみですが、痕跡が残る町家は複数あります。

＊1 参照　調査報告書の pp.21-22

江戸後期 (8)

【腰壁のガラス窓】

時代が下ると、地面から 1m ほどの腰壁が立ち、その上部に木製や金属製の格子が付けられるようになります。腰壁の部分は、大きな１枚の石が使われることもあります。

上部が装飾的な格子がみられます。

昭和 (17)

大正 (45)

二階の窓(一)

【虫籠窓(むしこまど)】

２階に設けられる格子状の窓のこと。虫籠のように見えることから、この名前が付けられました。

宇陀松山地区では、四角の窓以外に、丸い形 (D) や瓜型 (C,G) の窓など、様々な形の虫籠窓(むしこまど)があります。四角で縦の組子が入った虫籠窓(むしこまど)のうち、地区内では窓の中央の組子のみが太いもの (E,K) が多くみられます。中央の組子が太い虫籠窓(むしこまど)は、外枠が設けられる (E) ことが多いようです。また、窓に外枠がないシンプルな虫籠窓(むしこまど)や、角が丸い窓 (B,J) は、江戸時代の町家に多くみられます。

窓の大きさは、時代が下ると大きくなる傾向があり、近代以降はガラス窓が普及します。窓の大きさは大正時代以降は特に大きくなります。これは、時代により２階の高さが変化することに関係します。江戸時代中期は２階が居室でないため、２階の高さが低いですが、時代が下るごとに居室化が進み、人が入れるように２階の高さが高くなります。それに従い、窓も大きくなるのです。

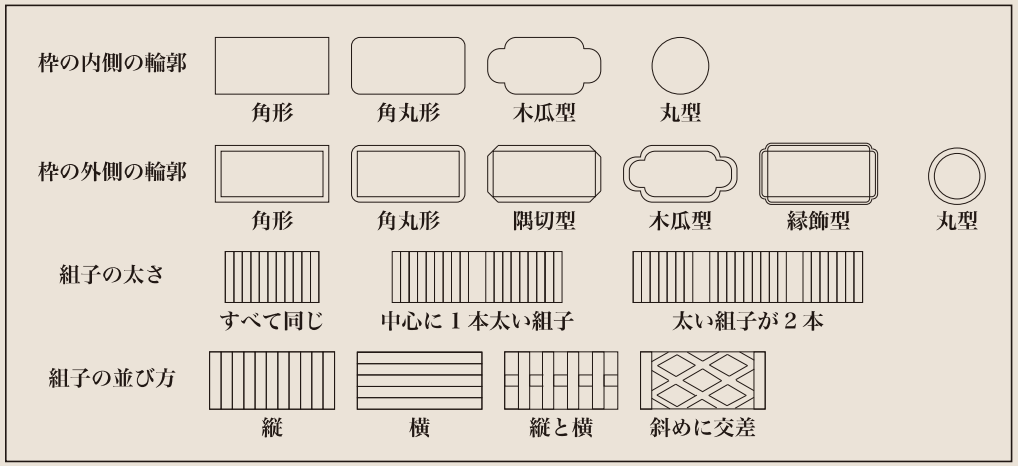


図 3-18　虫籠窓の細部意匠について＊（一部抜粋）

＊引用　調査報告書の p.19

二階の窓(二)

【虫籠窓】

A 江戸中期 (13)
角形 (内側)・角丸形 (外側)

B 江戸後期 (28)
横向きの組子

C 江戸後期 (10)
木瓜型

D 江戸後期 (73)
丸型

E 江戸後期 (1)
中心に 1 本太い組子

F 江戸後期 (8)
隅切型

G 江戸末期 (24)
木瓜型

H 明治初期 (18)
斜めに交差する組子

I 明治前期 (千軒舎)
縁飾型 (?)

J 明治前期 (16)
角丸形

K 大正 (37)
中心に 1 本太い組子

【格子入りの窓】

2 階の窓には、虫籠窓以外に、格子を取り付ける窓もみられます。

L 江戸後期 (20)

M 江戸後期 (1)

N 江戸後期 (格子入りの窓は新しい)(29)

O 大正 (2)

【ガラス窓】

かつては、大きな 1 枚のガラスを作ることが困難で、小さなガラスを組み合わせてガラス窓を作っていました。そのため、ガラスの割り付け方によって、ガラス窓は様々な形をしています。

P 昭和 (43)

Q 昭和 ?(74)

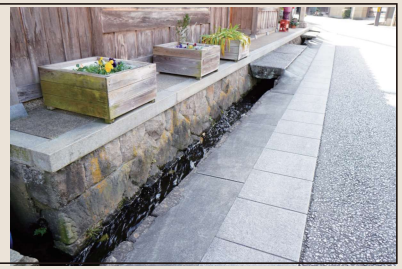
オリジナルな事例として、縦長の木瓜型のガラス窓もみられました。

R 昭和 (75)

宇陀松山地区には、町家の前に水路があります。地元の方は「前川」と呼んでいます *1。

流れる水は水量が多く、せせらぎの音に風情を感じます。

＊1 参照　調査報告書の p.49



袖卯建（そでうだつ）

「卯建（うだつ）」は一般的に、建物の両端だけ屋根を高くして、小屋根を付けたものを指します。「板屋根の端の保護」*1 が、やがて家の格の建築的な表現として *2 使われるようになったといわれます。「防火の役目をもつ」*3 という説もあります。「うだつがあがらない」という言葉が残っているのは前者の名残です。

「袖卯建（そでうだつ）」は、２階の壁面の両側に取り付けられた壁のことで、家格の象徴で、本来の卯建（うだつ）と違い、屋根の上ではなく下につけられます。道から良く見えるように屋根の下につくのでしょう。袖卯建（そでうだつ）は「目隠しの目的」*4があるともいわれます。

宇陀松山地区では、「袖卯建（そでうだつ）」を持つ町家がみられます。特に、板状で、上広がりの台形の袖卯建（そでうだつ）(A-J) が多いです。また、数は少ないですが、長方形のもの (O,P) や、屋根の上にあり上部に瓦屋根がついた袖卯建（そでうだつ）(L-N) もみられます。袖卯建（そでうだつ）を持つ町家は、江戸時代の建築が多いです。
また、ほとんどの袖卯建（そでうだつ）の中央に、家紋や文様が入っています。袖卯建（そでうだつ）の中央に設けられた帯状の装飾は、大正時代以降みられなくなります。

＊1,2 引用　日本民俗建築学会『写真でみる民家大事典』(柏書房 ,2005,p.77)
＊3　引用　調査報告書の p.19
＊4　引用　『建築大辞典　第２版＜普及版＞』(彰国社 ,1999 第５刷 ,p.950)

【宇陀松山地区で一般的な台形の形】

A 江戸後期 (70)

B 江戸後期 (9)

C 江戸後期 (29)

D 江戸末期 (49)

E 江戸末期 (薬の館)

F 江戸末期 (19)

【宇陀松山地区で一般的な台形の形】

G 明治後期 (41)

H 大正 (20)

I 昭和 (35)

J 昭和 (2)

宇陀松山地区の町家には、袖卯建（そでうだつ）が２階の中央付近にも設けられる事例があり、後世の改造 (2 軒を 1 軒につなげた) の結果だと考えられます。

K 江戸後期 (拡大図 C)

【宇陀松山地区では珍しい形】

L 江戸後期 (8)
屋根の上にある袖卯建（そでうだつ）

M 江戸末期～昭和 (28)
屋根の上にある袖卯建（そでうだつ）

N 昭和 (17)
屋根の上にある袖卯建（そでうだつ）

O 江戸後期 (10)
長方形

P 江戸後期 (73)
長方形

Q 明治～昭和 (76)
特殊な形

幕板

幕板は、板葺き屋根の軒先の上部に幕のように取り付けられる横に長い厚板のことです。「垂木の先端に木栓などで固定」されます。*1

幕板は、幕掛け (p.18 下) と同様に、幕を掛ける目的があるとも考えられています。「雨風から店先を守るため」*2 に設置されるという説もあります。

宇陀松山地区では、幕板は江戸時代後期の町家に多いです。長方形の板を並べたもの (A-E) が一般的ですが、長方形の板の間にガラス板が挟まれたもの (F) や、一枚板のもの (G) もあります。幕板の長さは、住居の端から端まで設置される場合もありますが、1 部屋分の幅だけ設置される場合もあります。また、宇陀松山地区では、幕板は町家の玄関がある面に設置されますが、角地に一軒のみ、玄関のある面でなく道に接するもう片側に幕板を設置する町家 (B) がありました。しかし、幕板の取り付け方が不自然なため、玄関がある面に取り付けていたものを移動させたと考えられます。

＊1 引用　日本建築学会民家語彙集録部会『日本民家語彙集解』(日外アソシエーツ ,1985,p.697)
＊2 引用　亀山市 HP　https://www.city.kameyama.mie.jp/docs/2014112311976/machiya2.html
(参照日：2024/10/16)

左：幕板の拡大写真 (24)
右：町家の側面に設置される例 (1)

【小さな板を並べる例】

A 江戸後期 (7)

B 江戸後期 (1)

C 江戸後期 (72)

【小さな板を並べる例】

D 江戸末期 (薬の館)

E 大正末〜昭和初期 (21)

【板とガラスを並べる例】

F 江戸末期 (24)

【一枚板の例】

G 大正〜昭和 (2)

【出桁に切り込みが入っている例】

1 階の軒を支える出桁に、切り込みが入っている町家があり、幕板の跡だと考えられます。元は幕板がありましたが、後世に何らかの理由で撤去されたということです。

H 江戸末期 (19)

【幕掛け】

出桁から吊り下げる横木のこと。冠婚葬祭のときに幕をかけるため、幕掛けと呼ばれます *4。　横木にはフックが等間隔に設置されています。

＊4 引用　日本建築学会民家語彙集録部会『日本民家語彙集解』(日外アソシエーツ ,1985,p.697)

I 江戸後期 (1)

J 江戸後期 or 明治以降 (70)

K 大正 (20)

持ち送り

軒が垂れ下がらないように支えるための構造材を持ち送りといいます。しかし、そのような構造の機能だけでなく、家ごとに様々な装飾がなされているのも見どころです。「通常階下の戸口前などの大庇を受けるため」*1 に付けられることが多く、宇陀松山地区でも、玄関の近くに設置されている住宅が多いです。

宇陀松山地区では、木材で曲線状にデザインされたもの (A-E) が多いです。他に「斜めに棒を渡しただけのもの」*2(F) もあります。

持ち送りがある町家の建築年代は、江戸時代や明治時代など古い時代ですが、現存している持ち送りの中には、比較的新しく取り付けられたと考えられるものもあります。金属製の持ち送り (G-I) は後世に設置されたと思われます。

＊1 引用　川島宙次『民家のデザイン』(相模書房 , 平成元年第 2 刷 ,p.90)

＊2 引用　調査報告書の p.20

【板状】

A 江戸後期 (72)

B 江戸後期 (9)

C 江戸～明治期 (77)

【板状（渦巻）】

D 明治前期 (71)
（持ち送りは建築年代より新しそう）

E 大正 (14)

【板状（方杖）】

F 明治前期 (48)

【金属製】

G 江戸後期 (10)
（持ち送りは建築年代より新しそう）

H 江戸後期 (73)
（持ち送りは建築年代より新しそう）

【２階に持ち送りが取り付けられた例（珍しい）】

I 江戸～明治期 ?(78)

J 江戸後期 (72)

宇陀松山地区には、意匠が凝らされた看板が多くみられます。薬の館には、組物が組まれた屋根を持つ看板があり、非常に豪華な造りになっています。

看板 (薬の館)

看板拡大図 (薬の館)

出入口

出入口は、江戸時代のまま残存しているものは無く、近代以降に使いやすいように改変がされています。しかし出入口にも、各家で格子状のもの、洋風の太い框で囲ったものなど、デザインに様々な工夫がなされています。

扉の開き方も、片引き戸、2枚の戸が引違いになるもの、3枚の戸、4枚の戸がそれぞれ引違いになるものなど様々です。

【格子戸】

(13)

(18)

(28)

(71)

(46)

(37)

【ガラス戸】

(2)

(14)

(41)

格子戸やガラス戸ではなく板戸の住宅や、引き違い戸ではなく戸袋に戸を引き込む形式の住宅もみられます。

板戸 (79)

引き込む形式の戸 (9)

座敷玄関

規模の大きな町家では、土間を通らず座敷に直接出入りが出来るように、座敷の前に出入り口を設けている町家があります。地元の方は「座敷玄関」と呼んでおり、調査報告書にも「ここでは、この特別な玄関を座敷玄関とよぶこととする。」*1 と記載されています。

座敷玄関は、土間にある主要な出入口の玄関に比べて小さい傾向があります。現在は、玄関の前に駒寄せや犬矢来が設置されていて、入口として使用されていないことが多いです。

＊1 引用　調査報告書の p.22

江戸後期 or 江戸末期 (28)

江戸後期 (20)

江戸後期 (10)

江戸後期 (73)

明治以降 (70)

明治中期 (29)

明治前期 (71)

明治後期 (46)

昭和 (17)

駒寄せ

道路沿いにある町家で、人が軒下に立ち入るのを防ぐために設けられた柵のこと。「米屋、醤油屋、酒屋などで、積荷を運んできた牛馬をつなぐため」*1 に設置されている場合もあるそうです。

宇陀松山地区では、木材をそのまま使用しているものと、栗材に釿（ちょうな）ではつって、凹凸のある模様にしているもの（名栗仕上げ）があります。

駒寄せの高さは、格子と同じくらいの高さのものと、上部が少し短くなっており、奥の格子が見えるものの大きく２種類に分けられます。

＊1 引用 『建築大事典　第２版＜普及版＞』(彰国社 ,1999 第５刷 ,p.586)

【木材をそのまま使用した例】

拡大図 (29)

(7)

(21)

【名栗仕上げの例】

拡大図 (70)

(10)

(8)

（珍しい例に、金具を使用したものや、高さが低いものもあります。）

(35)

(36)

(71)

犬矢来

建物の壁の地面に近い部分を保護するために取り付けられた囲いを犬矢来といいます。竹を曲げて作られます *1。

宇陀松山地区では、高さが 1mに満たない低い犬矢来がみられます。

＊1 参照 『建築大事典　第２版＜普及版＞』(彰国社 ,1999 第５刷 ,p.94)

(1)

(71)

(8)

煙出し

囲炉裏やかまどから出る煙を、外へ逃がすために、屋根の上に作られた排気穴のこと *1。宇陀松山地区では、江戸時代から明治時代の古い町家にみられ、外観にアクセントを加えています。

(薬の館)

(4)

(80)

(81)

(71)

＊1 参照　川島宙次『民家のデザイン』(相模書房 , 平成元年第２刷 ,p.15)

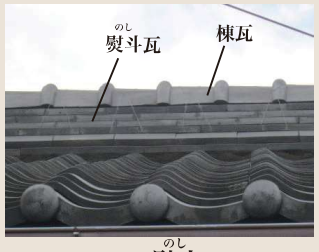
瓦（一）

瓦は、後世に何度も葺き替えられ、年代が分からないため、ここでは、宇陀松山地区でみられる様々な意匠的な瓦を紹介します。

【熨斗瓦、棟瓦】

屋根の棟には、熨斗瓦と棟瓦が置かれます。熨斗瓦とは、棟に積まれている細長い瓦で、一般的な瓦を半分に割って使われます *1。棟瓦は、熨斗瓦の上、棟の最上部に使われる瓦です *2。熨斗瓦の間に、模様がある棟込み瓦が組み込まれる例もあります *3。

宇陀松山地区では、棟込み瓦に輪違い瓦や青海波、松皮菱などが使われます。

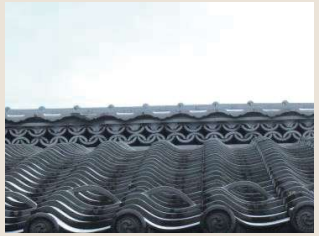


A シンプルな熨斗瓦 (12)

B 棟込み瓦が松皮菱 (19)

C 棟込み瓦が青海波 (15)

青海波は波形の模様のことです。*4



D 棟込み瓦が輪違い (71)

「半円形の瓦を上下互いに重なるように積む瓦」*5

E 棟込み瓦が珍しい模様 (10)

松葉がモチーフだとされています。

【鍾馗さん】

屋根の棟に、鍾馗さんと呼ばれる魔除けの像が設置されている住宅があります。

鍾馗…「中国で、疫病神を追いはらい魔を除くと信ぜられた神」*6

G 鍾馗さん (82)

【熨斗瓦】

1階の軒と2階壁面の間にある熨斗瓦を紹介します。棟にある熨斗瓦と同様に、模様がある棟込み瓦が組み込まれている町家がみられ、意匠が凝らされています。棟込み瓦には、松皮菱 (D)、青海波 (E)、輪違い瓦 (F) に加え、笹の葉の形をした模様の瓦 (G) もみられました。宇陀松山地区で最も使われていた棟込み瓦は松皮菱でした。また、熨斗瓦と熨斗瓦の間を接着するために漆喰を塗る例 (C) もみられます。

A 短冊状の熨斗瓦のみ (13)

B 丸い瓦が組み合わさる (5)

C 白漆喰が塗られる (43)

D 棟込み瓦が松皮菱 (71)

E 棟込み瓦が青海波 (29)

F 棟込み瓦が輪違い (70)

G 笹の葉の模様 (14)

＊1 参照　日本建築学会民家語彙集録部会『日本民家語彙集解』(日外アソシエーツ ,1985 第 1 刷 ,p.594)
＊2,3 参照　『建築大辞典　第 2 版＜普及版＞』(彰国社 ,1999 第 5 刷 ,p.1624)
＊4,5 引用　『建築大辞典　第 2 版＜普及版＞』(彰国社 ,1999 第 5 刷 ,p.879,p.1792)
＊6 引用　『日本国語大辞典　第二版　第七巻』(小学館 ,2012 第二版第七巻第七刷 ,pp.66-67)

瓦(二)

【軒桟瓦】

軒先に用いる桟瓦です *1。

宇陀松山地区では、鎌軒瓦 (A)、万十軒瓦 (B,C) が一般的に使用されています。文様が入った瓦が多いのも特徴です。一文字軒瓦は昭和の町家にみられます。

A 鎌軒瓦 (1)

B 万十軒瓦 (薬の館)

C 万十軒瓦 (19)

D 一文字軒瓦 (70)

【軒丸瓦】

軒先に用いられる丸瓦です *2。文様が入っていない瓦 (E) と巴の文様の瓦 (F) が良くみられます。

宇陀松山地区では、屋根の両端に２列ずつ丸い瓦が設けられる傾向があります。瓦列の幅をあわせるための技法で、この２列の瓦は「風切り瓦」と呼ばれます。*3

E 文様が無い瓦 (7)

F 巴の文様の瓦 (35)

G 地区内でオリジナルな文様 (41)

H 地区内でオリジナルな文様 (73)

I 地区内でオリジナルな形 (70)

J 文字が書かれた瓦 (9)

K 文字が書かれた瓦 (83)

＊1,2 参照　金子智「近世瓦の基本分類―江戸遺跡出土品を中心に―」
(「文学研究科紀要別冊第二十集」哲学・史学編抜刷 (1993 年早稲田大学大学院文学研究科),p.135,137)

＊3　参照　調査報告書の p.20,30

【鬼瓦】

鬼瓦は、棟の端を塞ぐ瓦のことで、装飾にもなっています。鬼は魔除けの意味があり、雲や渦、波の文様は、火事を防ぐ意味が込められています。「瓦の中央には家紋や屋号、あるいは宝珠などの吉祥文を入れることが多い」*4です。

宇陀松山地区でも、中央に文字が入っていたり (M)、家紋が入っていたり (O)、住宅により個性がみられます。

＊4 引用　川島宙次『民家のデザイン』(相模書房 , 平成元年第 2 刷 ,p.32)

L「水」の文字が入った瓦 (16)
（複数みられる）

M「町」の文字が入った瓦
（福祉会館、旧町役場）

N 金色の戎さんの装飾 (39)

O 中央に家紋、縁に波の模様が彫られた瓦 (41)

P 大黒さんの装飾 (19)

Q 戎さんの装飾 (72)

R 花の装飾 (7)

軒裏

軒裏は、木材が見えないように漆喰で塗りこめて仕上げているもの（塗り籠め）と、木材をそのまま見せているものがあります。

宇陀松山地区では、どちらもみられます。塗り籠めの事例では、漆喰で波の模様を作っている軒裏 (B-D) がみられます。塗り籠めない事例の場合も、化粧小舞が付いていたり (G-I)、木目が美しい板が使われていたり、意匠が凝らされています。ただ、化粧小舞が付いている町家は宇陀松山地区では珍しいです。

大屋根の軒裏に着目すると、漆喰で塗り籠めたものが多いですが、いくつかの町家で、木材をそのまま見せた塗り籠めないもの (J) もみられます。時代が下ると塗り籠めない軒裏の町家が増える傾向にあり、「次第に軽快な仕上げ」*1 になるようです。一方で、庇の軒裏は、ほとんどが塗り籠めないようになっています。また、垂木が無い板軒の町家もみられます。

＊1 引用　調査報告書の p.30

【塗り籠める例】

A 大屋根の軒裏 (一般的)(70)
垂木の形状を見せる塗り方

B 大屋根の軒裏 (1)
垂木の周りが曲線的

C 大屋根の軒裏 (20)
丸太の垂木を塗り込める
宇陀松山地区では「のどご」と呼ばれます。

D 大屋根の軒裏 (5)
波形

E 大屋根の軒裏 (18)
板軒

F 大屋根の軒裏 (14)
板軒

【塗り籠めない例】
①化粧小舞が付いている軒裏の例
化粧小舞とは、軒裏に取り付けられている細い木材のことをいいます。
宇陀松山地区では、珍しい装飾ですが、数戸の住宅でみられました。

G 大屋根の軒裏 (15)

H 庇の軒裏 (45)
化粧小舞が２本ずつ
取り付けられている

I 庇の軒裏 (8)

【塗り籠めない例】
②化粧小舞が付いていない軒裏の例

J 大屋根の軒裏 (42)

K 庇の軒裏 (5)

L 庇の軒裏 (73)

【塗り籠めない例】
③板軒の例

M 庇の軒裏 (36)

N 庇の軒裏 (17)

外壁

壁は、白い漆喰か、黒い漆喰で塗られたものが多いです。黄色の壁は少ないです。宇陀松山地区では、壁が漆喰で塗りこめられ、外部に柱が見えない「大壁」と呼ばれる形式の町家と、外壁面に柱が見える「真壁」の町家、両方がみられます。時代が下ると「真壁」の町家が増え、軒裏と同様に「次第に軽快な仕上げとなる」* ようです。

＊引用　調査報告書の p.30

【白漆喰】

宇陀松山地区では、白漆喰塗が多いです。(13)

【黒漆喰】

宇陀松山地区では、黒漆喰塗の町家は少ないです。(20)

【黄色の壁】

数は少ないですが、黄色の外壁もみられます。(薬の館)

【明るい青灰色の漆喰】

明るい青灰色をした外壁もあります。宇陀松山地区では「浅葱色」と呼ばれます。(73)

【大壁】

2 階が大壁の町家 (21)

【真壁】

真壁の町家 (24)

修景事例

重要伝統的建造物群保存地区では、新築する場合や、新しい要素を入れる場合に、歴史的な町並みに合わせて外観を整備する必要があります。これを修景といいます。景観に配慮しデザインを工夫することで、快適に生活が出来るように現代的な設備を設置することが出来ます。

ここでは、宇陀松山地区で周囲の景観と調和させた駐車スペースの例、室外機を囲い目立たないようにしている例を紹介します。

【駐車スペースの修景事例】

①一枚の扉を横向きにスライドさせて開閉する方式

A

B

C

②複数の戸をスライドさせる方式

D1（戸を閉じた状態）

D2（戸を開いた状態）

E

F1(戸を閉じた状態)

F2(戸を開いた状態)

G

修景事例

【駐車スペースの修景事例】

③扉が上に持ち上がる方式

H1(扉を下ろした状態)

H2(扉を持ち上げた状態)

④開き扉方式

I

J

番外編
格子から車が見える駐車スペース

K

駐車場ではないですが、格子をスライドさせる町家です。

L

格子戸をスライドさせて、店内を開放する造りになっている店舗もあります。

M1(格子戸を閉じた状態)

M2(格子戸を開いた状態)

【室外機・メーターの修景事例】

現代の生活に必要な空調設備も室外機に囲いをして設置することができます。

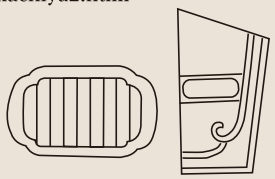
N

O

P

Q

R

参考文献一覧

・『建築大辞典　第 2 版＜普及版＞』(彰国社 ,1999 第 5 刷)
・日本建築学会民家語彙集録部会『日本民家語彙集解』(日外アソシエーツ ,1985 第 1 刷)
・日本民俗建築学会『写真でみる民家大事典』(柏書房 ,2005)
・川島宙次『民家のデザイン』(相模書房 , 平成元年第 2 刷)
・『せせらぎと手わざの町　大宇陀・松山　―松山・神戸地区伝統的建造物群保存対策調査報告書―』(大宇陀町教育委員会 , 平成 13 年)
・『日本国語大辞典　第二版　第七巻』(小学館 ,2012 第二版第七巻第七刷 ,pp.66-67)
・金子智「近世瓦の基本分類―江戸遺跡出土品を中心に―」(「文学研究科紀要別冊第二十集」哲学・史学編抜刷 (1993 年早稲田大学大学院文学研究科),p.135,137)
・亀山市 HP　https://www.city.kameyama.mie.jp/docs/2014112311976/machiya2.html
(参照日：2024/10/16)